

井上陽水英訳詞集

2019年(令和元年)6月29日(土)

享月

日

講談社 2916円

ロバート キャンベル(著)

この本を書評すると言つと、いつになく多くの人に声をかけられた。それぞれの陽水体験を話してくれたら、陽水が英語で歌った30年以上前のカセットブックを紹介されたり。

でも、本書はあくまでも日本文学者キャンベル氏の著作。8年前、命に関わる病気の中で、陽水の詞を英訳し、その「歌詞世界に深く降り立つ」決意をしたことから生まれた稀有な本だ。

嬉しいのは、いきなり英訳版を読者に供すのではなく、完成までの過程が丁寧に記されていること。日本語の世界の「軽やかさの底には深みがあり、深みは余白につながり、余白の中で読者は想像力をかきたてられる」と考える著者は、日本語と英語とを往還しながら、この「余白」への接近を試みる。一つの方法が、歌詞を日本文学史の文脈に位置づけることだ。永井荷風から江戸時代に流行ったイソップ寓話まで、参照される作品は実に多様だ。

もちろん、陽水との対話も重要だ。たとえば「都会では自殺する若者が増えていく」という出だしから、「だけでも問題は今日の雨傘がない」への転換が印象的な「傘がない」。I've Got No Umbrella(訳そうとする著者に対し、陽水はこれは「『俺』の傘ではなく、人間、人類の『傘』なのです」と答える。

あるいは「最後のニュース」で、環境破壊や戦争に触れたあと「今 あなたに Good-Night / ただ あなたに Good-Bye」と続く結び。これも just for you はなく、「かける言葉はいろいろあるかもしれないけれど、『グッバイ。ただこの言葉ぐらいかな』みたいなニュアンス」だ。人稱を特定するところばれ落ちてしまう「余白」が掬い上げられる。

できあがった英訳は、心憎いほど精緻で、しなやかだ。そして妥協を許さない。「翻訳は基本的に原作に隸属すべき」であり、事象を足したり引いたりせず、取りこぼしを少なく、という著者の潔さが印象的だ。

Robert Campbell
57年、米ニューヨーク生まれ。国文学研究資料館館長。専門は近世・近代の日本文学。

評・西崎 文子

東京大学教授・アメリカ政治外交史